

# 佐伯藩士 古田家

## 勝間田 三千夫

(会員・佐伯市中村北町)

### 一、古田家の始祖

古田家は、天文年中(一五三二—一五五四)美濃国大垣に於て古田織部正藤原重勝が秩拾万石を領するを以て始祖とする。いまを去ること四百三十有余年前である。

この頃、摂津国は中川清秀(後、豊後国岡藩主始祖)が天文十一年(一五四二)山城国に生を成し、彼地に茨木の城を築き、その近郷を領していた。

清秀は、池田勝政に属していたが、後、織田右府(信長)に属した。右府の没後、豊臣太閤に与力して、天正十年(一五八二)明智光秀の反逆のとき、太閤の先手となって戦った武雄であり、古田家の始祖は、この中川氏と共に戦国の乱世を生き延びてきた。

古田織部正重勝の室は、この中川清秀の妹であり、男

子三人が生まれた。

長男左助は、天正年中(一五七三—一五九一)中川頼兵衛尉清秀公の家臣となり、俸禄三拾口を賜り仕えた。その苗裔(子孫)は家津屋喜兵衛であると。

次男左馬允は、文禄年中(一五九二—一五九五)中川修理大夫秀成公に秩四百石を賜り、大夫の官名を以て仕えた。

この秀成公は、清秀の次男であるが、後述する長男秀政の後継となって、中川公の第四代となった人である。

秀成は、元龜元年(一五七〇)摂津国に生まれ、豊臣太閤に仕え、朝鮮の役に彼の地に在って兄秀政が遺領をつぎ、明兵との戦いに功あつて、文禄三年(一五九四)帰陣の後、同二月三木城を改め、豊後国岡城に入封し、大野・直入・大分三郡の内に於て七万四百石を領した。

豊後岡藩は、この秀成を以て中川氏初代とした。この時、古田左馬允は従行されたかは明らかでない。

三男次郎左衛門友安は、初め摂州茨木に於て中川右衛門大夫秀政公及び世子中川修理大夫秀成公に仕えた。

この秀政公は清秀の長男で、永禄十一年（一五六八）摂津国に生まれ、織田右府に仕えた。父清秀が荒木村重を討った功により右府の婿となった。後、播磨国三木城を賜い豊臣の代になって太閤に従属した。文禄朝鮮の役に彼の地で討死した。時に文禄二年（一五九三）十月二十四日、二十五歳であった。よって二男秀成が世継ぎとなつて、文禄三年二月に岡城に入封したのである。

この秀成公が入封に及んだ時、友安は故あつて従行能わず、終に爵（官位）秩（扶持）を辞し、独り摂州に留まること三年、慶長二年（一五九七）に至つて、岡藩主秀成公の請により岡に至つた。この時、秀成公は為に任を直入郡木南切に、それに若干の田園を免じての請であつた。

友安はここに永住することになり、一男八左衛門友直と共に藩に仕えていたが、友直成人の後、肥後侯に仕えるに及んで、友安一代限りとなつた。今友直が肥後侯に

仕えた時のことを造酒は曰う。

「美濃屋惣五郎、寛永年中友直は肥後侯に秩（扶持）百石を賜り仕え……」

と。

かくして友直の代となつて、其の子に三左衛門友重が生まれた。友重は、後、祖父友安を襲ぐにあつて名を次郎左衛門と改めた。この次郎左衛門友重が、佐伯に於ける古田家の初代となつてゐる。

いま、佐伯に入郷した経緯を視ると、年譜は次のように言っている。

造酒曰く次に「……仕えていたが、歳餘り瘦細つた父子乞身して肥後を出で、而して友重佐伯に來り藩主に仕え奉る。高尚公男二子有り」と（男二子は一男一女の誤りであると思われる）。

この道中、父友直は没したのであらう。

さて、この寛永年中に佐伯藩を見ると、初代藩主高政公が、寛永五年（一六二八）十一月十六日、七十歳で生涯を閉じ、二代高成公が同日襲封したが、同九年十一月七日、三十歳の若さで没している。この高成公の時世に熊本藩に大事が起つてゐる。藩主加藤忠広公改易の大事

であった。為に高成公は幕命を受け、熊本城番を勤めていたが、その帰途中に急死した。よって三代は高成公の嫡子高尚（直）となり、寛文四年（一六六四）八月三日三十五歳で病没した。

友重が佐伯に来て、高尚公に二子あるを知るうえは、寛文二年から三年頃に仕えたことになろうかと推察する。従って佐伯に入国したのは寛永九年（一六三二）頃かと思われる。

古田家は、藤原支流古田織部正重勝を始祖とし、二代藤原友安、三代藤原友重、この藤原友重名を改め、古田次郎左衛門を以て年譜は系図化されている。

古田次郎左衛門の配は、山本与左衛門の女（むすめ）伊勢である。伊勢は一子了斎を連れての再婚であった。よってこの了斎を義子と為し、名を重興と改め、別門を興して側坊主で身を立たせた。なお、この重興の室には和田源三郎の女亀を迎え、一男二女が生まれ、長男は久兵衛といい、別門を興して藩の目見格として仕えた。

さて、古田次郎左衛門友重には、配伊勢との間に男二子が生まれ、長男重清は初名を助五郎といい、後、与左衛門と改め、藩の徒士、後、擢んで中小姓近習を為し、

江戸藩邸に仕えていた。また、次男重久は、初め伝兵衛といい、別に一門を興し、藩の徒士として、兄と共に江戸藩邸に仕えていた。が、元禄三年（一六九〇）九月、十月に兄弟相次いで江戸に没し、こゝに至って世継ぎを損し、古田家これまでの血族は絶えて訖った。

よって、古田家は、養子を迎えることよって再興を図った。次郎左衛門友重は、後継に町人与三の次子重正を迎え、名を庄左衛門と改め、藩に出仕させた。藩は重清・重久の忠勤を堪え、二子旧席の徒士を命ぜられた。

なお、室には、母（養母伊勢）の子（連子）了斎重興の長女千代を迎えた。こゝに至って爾来古田家の血族は絶えることなく隆盛を極め、今日に至るのである。

庄左衛門重正の実子は、四男二女、長男与左衛門正徳が世子となるため、四男に生まれた当興は別門を興している。名を古田平八と改め、藩の中小姓格として一家を為している。因にこれが後節に述べる古田豪作の祖である（後述）。

さて、本家は世子与三左衛門正徳が、壮年に至って家に没してしまった。よって、その後継は、二男・三男は幼にして早世したため、女（むすめ）に養子を迎えるこ

ととなった。長女倉に日野浦の医師岡部順正の長男甚左衛門正基を養子として迎えた。

甚左衛門正基の子は三男六女。長男甚蔵正安は、宮崎五郎右衛門の妹を娶ったが子に恵まれず、よって世子に長田友左衛門の弟正可を養子に迎え、妹をそわせ、一女に恵まれたが早世、よって佐蔵正可は後継に養父正安の叔伯古田平八当興の次男正淑（節右衛門）を迎えたのである。

## 二、藩校と古田節右衛門

正淑、幼名を六弥太。後、音次郎、また松蔵と称し、字は淑叟といふ、後、名を節右衛門と改め、天明八申年（一七八八）四月七日、江戸に於て徒士目付を為していたが、故あって免ぜられ、寛政二戌年（一七九〇）十月藩校四教堂博士教授に登用されて十三年、後、また江戸に上り、徒士目付を為す事一年、後、徒士小頭を為す。文化七年（一八一〇）十二月十七日、転じて山奉行を為し、文政十亥年（一八二七）正月二十四日、罷官して子大之進に同日付で山奉行を継がしめた。

この天明から寛政にかけては、佐伯藩は八代藩主高標侯の治世であった。高標侯は宝暦十年（一七六〇）八月九日、六歳で家督を継ぎ、享和元年（一八一〇）まで、実に四十二年間、天災地変等による藩経済の立直し、また、苦しい財政の中にも拘わらず文教政策に力を入れ、安永六年（一七七七）藩校四教堂の開設、また、天明元年（一七八一）の佐伯文庫の創設、その充実に当って和漢の書籍を購入した。殊に漢籍の類は、他藩羨望の的となった宝典が数万冊に及んだと言われている。これら典籍の殆んどは、文政十一年に至って幕府に献上されることとなったのであるが（略）。

古田節右衛門が、天明八年江戸府にあって徒士目付の頃藩主高標侯三十四歳。国には藩校四教堂、また、佐伯文庫も既設されていて、高標侯一代に収集された書籍は、天明六年から寛政二年頃には二西を傾くる程となり、同四年には、既に万巻の蔵書となっていた。よって藩は、古田節右衛門を藩校四教堂祭酒に登用し、その執務を取らせた。

寛政二年（一七九〇）十月、節右衛門が四教堂博士教授に登用されて十三年間とあるは疑義なきところであり

享和三年（一八〇三）九代高誠侯二十七歳のときまで四  
教堂に教授した。

寛政六年、藩主は日田に在った松下筑陰を招聘して四  
教堂の儒官とした。筑陰享和三年古田節右衛門を後継し  
て四教堂の祭酒に登り、佐伯に没する文化七年（一八一  
〇）八月二十四日まで、実に十六年間にわたり藩学興隆  
の気運を開いた。その間、両儒は共に藩学教育に従事さ  
れ、その風尚は藩士門弟に影響を与え、後に偉大な人材  
を輩出させたのである。

総じて佐伯藩の学問は、既述のように延宝年間（一六  
七三）時の藩主六代毛利高慶侯が藩政の門戸を開き、人  
材登用等施策を図り、また、文武を奨励するなどして藩  
士の志気昂揚を図ることに始まり、八代高標侯に至って  
更に文教政策に力が入れられ、その学問の深さは、三百  
余藩を圧する程の人であった。九代高誠もまた父高標の  
学問に感化され、文武奨励に力を注いだ人であった。こ  
こに至る百五十年間は、幕府の寛政改革も加わって、諸  
藩は競って文武を推重し、文化・文政・天保にはその隆  
盛を極めたのである。

高標侯は、安永元年（一七七二）和泉守に叙任され、

後、寛政元年（一七八九）四月、伊勢守に叙任された。

和泉守の天明六年には、既に「佐伯侯図書目」が録され  
ているが、それは、高標侯自ら認めたものか、もし儒臣  
が録したものであれば、時の矢野黙齋・山本七兵衛によ  
るものであろう。また、寛政五年、伊勢守の時に「佐伯  
侯蔵書目録」がある。これまた同然に考えられるが、こ  
の時既に古田節右衛門は、博士教授に登用されていたこ  
とから推察すると、学事総監の任にあつて筆録されたも  
のと見るが妥当であらう。

かくして、古田節右衛門の藩学教授十三年間は、藩主  
建学の片腕となって、全国三百余藩にその名を轟かせる  
礎を築き上げたことにあり、その貢献度は高くに評価さ  
れるものである。

節右衛門の室は、吉野半太夫の女里恵。子は六男二女  
であった。

長男重遠は、寛政二年七月二十二日に生まれ、幼名を  
安五郎、後、郡太又新之丞又新八郎といい、字は任道、  
後、重秀、子実と称した。十八歳の文化四年七月朔日、  
徒士見習となり、同七年七月朔日を以て番頭書記を為す  
文政元年七月二十三日、二十九歳の時、江府に於て芸事

を成立して給扶持を賜った。同十年正月二十四日、三十八歳で家督相続し、父節右衛門の官職を継いで山奉行に任ぜられた。天保元年（一八三〇）十二月二十一日、委史（蔵番役）を以て事（わざ）を研精した。藩主は芸事之故を以て擢んで中小姓並に登用した。

大之進重遠の室は、宮脇七郎右衛門の女浦。後名を園と改めた。享和元年四月四日生まれ。大之進とは十二歳違い。子は一男四女。長男重義は、文政六年（一八二三）十月朔日に生まれ、名を三穂太郎、後、猪三郎と改め、また、大之進と改め、後に安宅と改めた。

天保四年（一八三三）九月十七日、十一歳の時、父大之進重遠末期の頃、父の願い通り仰付けられ、五人扶持を下し置かれた。明治十一年十一月二十七日、五十六歳で没す。以下、その後の系図はこれを省いた。

以上、古田家の系図は、古田織部正重勝より通算して重義まで十代、また、佐伯の地に古田姓を定住させて、古田次郎左衛門友重より重義まで八代、なお、現世古田家の血族からみれば、庄左衛門重正を初代として重義まで七代となる。

次に古田家に今一人紹介しておきたい人物があるので

それについて述べることにする。

#### 別門・古田平八当与

#### 一、古田 豪 作

古田豪作を述べるとき、今一度古田家を顧みなければならぬ。

既述のように、豪作の先祖は古田家の分かれて、別に一門を興したことに始まる。遡れば、古田家の先祖、初代庄左衛門重正（養子）に血をひき、その子、二代古田平八を祖父とし、この平八の長子七左衛門正温が豪作の父である。従って、既述の古田節右衛門（本家後継）は父の弟であって、豪作の叔父にあたる人である。今それを年譜に見ると、祖父古田平八当与は、庄左衛門重正の第七子に生まれた次男になる。別に一門を興し、藩の中小姓の役職を為した。幼名を与四郎という。享保五年（一七二〇）十二歳の時、六代藩主高慶侯に抜擢され、側坊主を為す。更に名を軽飛と命ぜられ、後、除して中小姓を為した。その生涯は、宝暦十四年（一七六四）正月二十七日、五十六歳で江府（江戸）に閉じた。

その子五人(二男三女)。長男正温(豪作の父)は延享三年(一七四六)頃生まれ(推定)、藩に登るを以て名を七郎左衛門と改め、徒士を職とした。先室は、今井八郎兵衛の女曾根。二女を残して三十五歳で死す。後娶に佐藤茂左衛門の女登喜を迎えた。登喜は三男を生み、二男早世。長男正周(豪作兄)は、名を恵十郎と改めた。三男正道は谷蔵と改め、藩校に学んだ。この三男正道が豪作のことである。

豪作は、寛政六年頃に生まれている。後、藩校四教室に学ぶを以て名を谷蔵と改め、日田桂林荘に遊学するに及んで豪作と称した。時に藩主は学事を督励し、文学振興を図り、藩校に学ぶ子弟の中から優秀な人材を擢んで他国に遊学させる道を開いていた。その第一号となったのが中島増太・古田豪作であった。二子、両父に紹介者明石仙次(秋室)・松下左助(筑陰一子)に伴われ、文化十三年(一八一六)三月四日、中島増太十六歳、古田豪作二十一歳は、日田淡窓塾に入門した。

「淡窓日記」文化十三年丙子年三月四日の条に

佐伯侯臣古田豪作・中島増太入門。明石仙次・松下

左助・古田七左衛門・中島幹右衛門致報之

と、二子この日入門簿に自書し許可を得た。その夜から新屋香しい塾舎桂林園に書生藍山屯と共に寝起きすることになった。

この淡窓塾に学ぶ書生に与えられた使命は、塾風一筋唯一蛍雪の日々を送るのみであった。その月の二十七日且評改めに豪作・益多共に一級下に進んだ。六月二十八日の月且改めでは共に二級上に進んだ。しかし、それから十日後、豪作は思わぬ病魔に取りつかれ、惜哉幾もなく七月九日、入門して僅か五月にして帰らぬ身となった。

淡窓日記は、この日の状況を次のようにその条に

日暮豪作死。先是塾中多病弱者倏病忽起。無有甚者。豪作伏枕但数日耳。余亦小恙。不得往省。問諸塾生。皆云無害。至皆日暮。令助倉皇来報曰。急矣。屣履而往既無及矣。問之。曰。将上厠。眩暈而踣。遂絶。嗚呼哀哉。……略

と。また、淡窓はいたく豪作の死を悼惜して懐旧している。

益多豪作皆今年三月ヲ以テ入門セリ。二子佐伯ニ於テ俊才ノ称アリ。国君ヨリ資糧ヲ賜リテ、他方ニ遊学

セシメ、大成ノ後国用ニ供セントノ思召ナリトゾ。益多ハ俊逸ナリ、豪作ハ温良ナリ、共ニ得難キノ器ナリシカ、豪作ハ志ヲ遂ゲズ……中略……惜哉。

と。この懐旧からして見ても、三月四日の入門時に、窓に宛てた書状が明らかである。

以下、淡窓日記を続けて追ってみると、

七月十日 未時斂豪作屍。夜仮瘞於大超寺銀杏樹下

予(淡窓)与嚴君。門生俵屋藤四郎。皆往

見大超寺住持而帰。

七月十一日 到郷隣来看豪作病者。致謝。岩尾告別

連告別。公胤告別。

七月十七日 所赴佐伯人婦。同豪作兄(惠十郎)至

七月十八日 古田惠十郎(豪作兄)来見。夜葬豪作

於大超寺。予与嚴君。門生俵屋藤四郎皆

往。遂上塚而帰。夜訪惠十郎旅宿(俵屋)

七月二十日 招古田惠十郎及増太。饗焉。

七月二十一日 古田惠十郎来告別。夜往別惠十郎。

七月二十八日 月旦評改の日豪作除名。

古田豪作二十二歳、桂林園に於て没す。諸生塾に死んだ者は豪作が初めてであったと淡窓はいう。また、この

六七日以来塾中痢を病むもの多く、豪作もその一人であった。予(淡窓)小恙あって桂林園に行かず、往来する者に豪作の病の事を問うたが、憂うるに足らずと言うので安堵していた。ところが日暮になって、豪作が病急変したと知らせがあったので走って行ったが、既に事切れていた。厠より返り、眩暈して倒れ、そのまま開かなかつた。

それから十日程して、兄惠十郎が来たので、改めて葬式を行った。その時、益多碑文を作った。

その碑文は、今大超寺に存せりと懐旧しているのので、昭和六十三年の春、一見を念じて大超寺を訪ねたが、今は早や跡もなかった。しかし、益多(増太)が豪作の為に詩文を草しているので、それを紹介する。

文化十四年七月八日、一周忌を迎える夜、子玉(益多)は、豪作が来たって詩を贈ると夢みて一詩を賦して懐を述べている。

煌煌河漢影 低在老柳枝 閑吟力已倦 枕書臥空齋

故人恍入夢 顔容瘦如梅 忽探錦袋底 贈我七字詩

琅琅若金玉 語語一何悲 醒來無所見 虫声繞柴扉



淡窓もまた七月八日の夜夢みたことを懐旧して次のように言っている。

「予夢ニ先考卒シ玉ヘリ。共屍昧ニアリ、予奔走シテ喪事ヲ經營ス。時ニ傍ニ在リテ予ヲ助クル者アリ。其人即先考ナリ。予夢中ニモ亦其前後相応セサルヲ怪メリ。覚メテ後心ニ掛リシカトモ。夢境顛倒シタルヲ以テ、深ク憂ヘスシテアリシニ、翌日豪作死セリ。予先考ト行ナイテ事ヲ治ムル時、夢中ノ象倣佛タリ。是ノ時、哭詩二首ヲ作ル。

書劔西遊竟不帰 黄泉無路省庭間 可憐今夜高堂夢  
猶自分明著綵衣

南雅山前我祖 新塋咫尺隔蹊分 春蘭秋菊貧家祭  
不惜馨香併薦君

武士遊学して竟に帰らず。その屍は南雅山麓大超寺（大官寺）広瀬家祖墳に接した狭い墓地に葬られた。哭詩その二首のとおりに埋葬されたことであり、毎月の命日には墓参して靈を慰め、周忌には祭祀して冥福を祈って

いる。文化十四年七月九日、没して一年の小祥忌辰には淡窓は悽愴の感に堪えずと、益多賓客となって白絹を祭壇に供え冥福を祈った。

淡窓日記に

実為古田子由小祥忌辰。不堪悽愴之感。素饌供祭。

以益多為賓

と。

一そして、その年の十二月二十二日、益多は自から「豪作墓碑」を改め、年も暮れる二十八日に至って「古田子由墓碑」を建立した。温厚な益多の敬愛の気持ち伝わってくるようである。

翌文化十五年正月元旦、淡窓は元旦の開講終了後、聴者七人で大超寺子由の墓前に参詣した。

文政元年七月九日の周忌の淡窓日記には次のように認めている。

是日為古田子由大忌辰。持齋半日。

と。三周忌に当り、半日戒律を守っている。これより後文政四年十一月十一日、益多が大婦するまでには三年余りあるが、淡窓日記には古田子由の命日は書かれていな

い。いま、久成寺に眠る豪作の墓石にも建立の年月日は刻されていないので明らかに出来ないが、この年、古田家の年譜によると、両親は七十四五歳の時であり、八十一歳で没した時が文政十亥年五月二十二日であるので、没年以前であろう。それは墓碑の正面に、寿松院妙真日俗大姉と並んで、観想院孤月子由居士とあり、右面には古田正温と並んで継室とあり、また、左面に文化十三丙子年七月九日、於日田遊学中、二十有二歳卒正温二男同所於大超寺葬古田豪作正道とある。この豪作に合葬されている日俗大姉とは、父七左衛門正温の先室首根のことであり、また継室とは、後娶の登喜のことであって、兄恵十郎正周、豪作はその子である。いま一度古田家の年譜に見ると、

遊学日田年二十一死於雷広瀬求馬之家。茲年文化十

三子七月九日也。

と書かれているが、これは後世になって淡窓日記等により附記されたものであろうことが、「学」を用いていることよって明らかである。

願みれば、豪作・益多と共に藩校四教堂の数多の子弟に擢んでられ、国命により藩費を賜り遊学し、大成後は

藩儒として大いに囑望された青雲の士であった。僅か五ヶ月の塾生にして世を去った豪作であったが、淡窓が懐旧している如く、益多に劣らぬ俊才であり、塾にあって既にして字は子由と呼ばれた。

淡窓が、塾中成績拔群の書生の詩を編した「宜園百家詩」の中に僅か一詩のみであるが、「三編ノ五」に、筑後久留米築山穆士清纂評は、増太（益多）と共に学問連壁と称されていることからみても、淡窓の如く如く得難き器であった。若干二十二歳の生涯を閉じたとき、桂林園は盛夏であった。

終りに、詩撰されたその一詩を紹介して、嘗ての足跡を偲びたい。

秋 日山 行

蕭蕭短髮動微風

步自林西向嶺東

到处秋光看不住

白雲黄葉一溪中